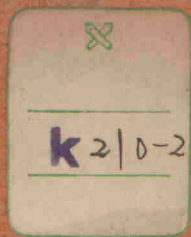


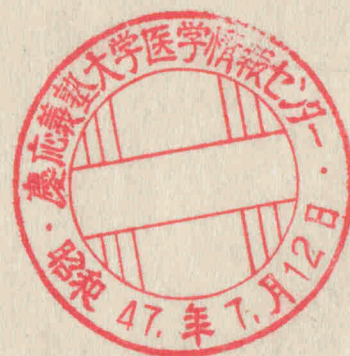
狂犬傷方



野呂元丈
狂犬傷方

493.877
Ky-2

No. 2860
1A K 210-2



富士川文庫

2908



それ狂犬乃人を咬と吾邦古来いふこと甚
きこと近年柔邦よりけ病りて西国より
はまる中国上方へ後りをさる東国も何
け犬ふれなる人傷ちるまに二ふは死さる
も何れ又きまあさきハばじめといふまを
いゆれも有ゆ輕きことにかゝるひく治療に
及るをあらそひけハ目を屬て病れも十
八九ハ死すまをく治療をく入てをばぬ



ふく食ふものなりやふくは病をまぬるなり
又或ハ舌を出し目々をふくふくをふくふく
いふ尾をたふすつこも粗大なるなり
人これを見ばやく用心のれさうまふハ
杖をもちぬせぐへふふえ悟りてくま
療治をねろろにすれハ必き死するなり
一粗犬小咬きをくハやく瘡口乃血を吸去
屋ハおぬにぬきて止ぬこれくきふなり

吸うきふなるハ人やすむへくきく
舌しをられ又血あさるハ針をさし血をとる
てず

一杏仁をよくすり餅乃くく大さハ瘡の
大小は隠ひ厚さ一分半にして瘡口ふき
く上より艾^{モクサ}煙をたふして十壯灸を
次の目より二壯灸く百日の内毎日灸を
一日も欠るなれ是方一此方也

は諸書よのせをわづらひたり杏仁の内、尻骨或ハ虎牙
或ハ狼牙を入るも有り或ハ豆豉ヅシ韭根を食するも有り或
おろしきおなれハ略く又杏仁餅をちりて瘡の上又煮
灸するにも有り或ハ生姜をちり葱白をちり法ありいづれも
よし然の内糸外治の妙法多しといへどもやゝ灸するより
宜きなり一切歎咬及惡虫毒蛇乃きしをるに其咬所は
灸され毒氣散りて害をのこさずこれをいづ大受も灸り
てハちきことをとるなり

一杏仁をすり水を入ちりて汁をとて飲
用又煮て毎日之を法々のむもよし
一杏仁をすり瘡上又何つく法けきればそ
いそへおきてよし

一咬きて好むしに二法あり敷くもいふ之三七首
敷きぎふに一日しては、がなきハ食く愈
ふや志ふへし七首とに韭の志なりけと薬枕
よ一色法ハ杏仁或ハ毎日一色法ハのめばよし
しある冬時ふれハ根をちりて搗けツキふ
れをへし瘡いふく好敷すふもよし妙方
なり

一山野人家なき所に咬き灸治法と

そふふよりしゝとき時、冷水を瘡をよく
けしむむと血の心脈を待て—のせきとむ
それれ又瘡大なる流水をすすむ
血止て垢ととをすすむ何てれ紙に
ぬくひととととと風の入ぬととと
大より

一地榆根を洗き瘡に付け又汁を飲用—生
なるものおとくハ乾姜を粉して付け又

さゆて一日に三度、百日留看て—

一頭髮蝟皮當分焼末おして一盞を飲

へ—或ハ病人目けく口嚙そのハ齒を折て

灌^{ツク}ふも久ぬなり

一苺^{トウゴ}麻子五十粒殼をさるよくすり塩水そ

瘡をけしむ付てよ

一梔子黑焼硫黄二味各分粉し瘡

よ付てよ

一蚯蚓糞水とよき泥のつくりしを瘡ふけく七
上と毛虫糸とを何やえけくし

一蝦蟇とり皮を剥きう切て蒜韭などを
入^{ナマス}鴨^{ナマス}とくくむ又焼炙ても食志むじ
又黒焼りし食のとりゆふて独てす初
咬^{ナマス}し時用^{ナマス}き^{ナマス}く^{ナマス}て^{ナマス}松^{ナマス}と^{ナマス}き^{ナマス}又^{ナマス}食^{ナマス}
垢お^{ナマス}く^{ナマス}き^{ナマス}ぬ^{ナマス}も^{ナマス}極^{ナマス}て^{ナマス}す^{ナマス}と^{ナマス}云

一瘡のへて垢きひく敷ききくハ生薑汁を

飲^{ナマス}て^{ナマス}す

一頭垢を瘡の内へ入てす

一砂糖を水と調瘡はぬり又砂糖水一二盞

を独てす

一乾姜乃末を常に独て又瘡の内へ入てす

一明礬を独てす瘡中へい^{ナマス}き^{ナマス}け^{ナマス}が

瘡くづき^{ナマス}い^{ナマス}へ^{ナマス}き^{ナマス}

一咬^{ナマス}け^{ナマス}れ^{ナマス}大^{ナマス}を^{ナマス}殺^{ナマス}し^{ナマス}腦^{ナマス}を^{ナマス}とり^{ナマス}瘡^{ナマス}は^{ナマス}ぬ^{ナマス}ハ

かきとておこし

一馬錢子一匁為末、酒で服し、

一咬所へ人糞或ハ大糞或ハ牛糞を何れに

附て、

一咬き、くち久くありてきびく、糞を治し

く、酒に用て極て、

雄黄五匁、麝香一匁、二味研と、のへ酒、

二匁用、ゆゑ病人服し、くちをきく、鼻に

はき、くちを、灌く、くちを、何れに

秘す、くちめおとろく、くちを、くちを、

くちを、くち大使より、悪物を、くちを、

くちを、くち前のを、すむ、くちを、

一傷を、くち人相、くち風、くちの、くちを、

くちハ虎牙或ハ虎、くちを、割飲、くちを、

一毒氣、散、くち物、くちを、くち、或ハ毒、くち上り

て、煩、くち、くち、くち、くち、くち、人骨、灰

が斗水は調阿へてす

一斑猫の入系冊を小便より下を方諸書

小載て其功阿一か編より結事とも班猫

乃毒大ふ人一害阿一旦志の班猫当時求

る一ある今ふ載之る又右乃徳方を

用て由ぬれ一るも阿一考用ゆ

も方本るは詳なり

一病人頭頂上よりある髪一を阿一る

ちやくぬきけり

一風をさけ静なるふは居て出さず

一厚味ある物あるものすなる物小豆

生菜酸きもの鹹きもの百日内む

一鳥獸魚油臧酒を年の内む

一拘肉蠱蛹落一一生いむ

あるこれをわく

死を決して救

ちあり

右諸方法病源候

ハ後方千金方外臺

秘要文仲方備々

ハ品方崔氏方必効方

古今錄驗方袖珍

簡便方救急方經驗方

及元明之諸方書所載也然まづ或ハ精

或ハ略して甚異同あり有ふ今諸書

考合てたゞるを補ひ繁をハ削り其要

をいへるをて用やまきやれはめを也

元文元年丙辰初冬日野呂元文實夫撰

